

一八八五年九月二日(水)

バガヴァン・ルドラ医師とタクール、聖ラーマクリシュナ

タクール、聖ラーマクリシュナは昼食をすまされてから、いつもの場所に坐っておられる。医者の方バガヴァン・ルドラ先生と校長を相手に話をしていらいっしやる。部屋にはラカール、ラトウはじめ、信者たちがいる。

今日は水曜日、ナンドットシャヴの日(ナンドラ・ラマ・クリシュナの誕生日)、バッドロ月十八日、スラボン月八日から九日にかけて。一八八五年九月二日。タクールの病気について、あらゆることを医者は聞き調べている。タクールは床において、医者のおそばに坐つていらっしやる。(訳註、ナンドットシャヴ——クリシュナが養父ナンダの息子となったことを祝つて、クリシュナの誕生日の翌日に行われるお祭り)

聖ラーマクリシュナ「そーらみろ、薬は効きかないんだよ！ 体の出来具合がちがうんだから——」

「お金にさわる、結び目をつくる、貯える——これらすべて、タクールには出来ない」

「ところで、このことをどう思う？ わたしはね、お金にさわると手がかじかんでしまうんだよ。そして、息が止まりそうになる！ それから、帯ひもを結んだりすると、それを解くまで息ができないん

だよ！」（訳註、帯ひもを結ぶ——インド人は、着物のすみに金貨など大事なものをひもでくりつけておく習慣がある）
 こうおっしやつて、貨幣タカを一つ持つてくるようにとおっしやる。医者は見えていてびっくり仰天した。
 タクルの掌てのひらの上にお金をおくと、手がかじかんだようにねじれてしまい、息が止まってしまった。
 お金をとりのぞくと、ゆっくりと深い息を三つほどして、手がやっと元通りになった。

「医者は校長に言った——」
Action on the nerves
 「神経の作用ですね」

「——以前の話し——シャンブー・マリツクの別荘でアヘンを結びつけたこと——郷里くカマルプクルで——」
 「マンゴーをとったこと——貯ためることは出来ない」

タクールはつづけて医者にお話しになる——「それから、もう一つあるんだよ。わたしは何でも、貯ためるといふことができないんだ！ 以前まえに、シャンブー・マリツクの別荘ドッキネーシヨル（南神寺院のすぐ南にある）に行つたときのこと——そのころ、ひどく腹の具合が悪かつた。シャンブーが、『アヘンを少しずつ飲むと楽になるよ』と言つて、わたしの下衣カズルのすみにアヘンをちよつぱり結びつけてくれた。それから寺へ戻つて門のところまでくると、何かしらん、グルグルその辺を廻りはじめた。まるで道に迷つたみたい——。ふと気が付いて、腰に結びつけてあつたアヘンを『ポイ』と捨てた。そしたら普通の状態にもどつて境内に帰つてくれた。

郷里くに行つたときも、マンゴーの実をとつて持つてかえろうとしたら足が前に進まない。マンゴーを凹地くにおいたら足が動いた！ え？ いったいこりや、どういうワケだろうね？」

医者「背後に、何か或る力(シャクテイ)が働いているのですね、心の力」というようなものが——」
 モニ「この方はそれを、神の力(God force)とおっしゃるのですが、あなたは心の力(Will force)とおっしゃるわけです」

聖ラーマクリシュナ「(医者に)——それから、こういうこともあるんだよ。もし誰かが、『良くなっています』と言うと、とたんにとても良くなるんだよ。いつかバラモン婦人が、『八アナ(50%)だけ良くなりました』と言った。——わたしはすぐに踊り出したよ!」

タクールは医者の人となりを見て、大そう満足されたようである。医者に向かつて、「あんたは、とてもいい性格の人だ。智慧ある人の二つの特徴しるしを持っている。——穏やかおだで、高ぶらない」

モニ「この方(医師)は、奥様を亡くされてね……」

聖ラーマクリシュナ「(医者に)わたしはいつも言っているんだよ——『三つの引力を合わせたら至聖かみをつかむことができる』って。母親が子供に感じる引力、貞淑な妻が夫に感じる引力、世俗の人が自分の財産に感じる引力。この三つを合わせてあの御方を求めればね。」

とにかく、わたしのバープ(先生)、この病気をよくしておくれ」

医者は病気の場所を診みにかかった。円ペランダに出した椅子に腰掛けられた。タクールは先ず、サルカル医師のことをおっしゃる。「ほんとに仕様がない。牛の舌でも調べるように引っぱって、抑えて……」

バガヴァン医師「悪気があってそうしたわけではありませんよ」

第21章 ジャンマシュタミーの日に南^{ドゥクネーシヨル}神寺において

聖ラーマクリシユナ「わかってるよ。よく調べようと思って舌を引っぱってくれたのさ」